

じょっぴんワード

教化の現場

北海道教区の青少年教化活動のひとつとして、毎年「全道小中学生同朋大会」が開催されている。この研修は「1人1参加者」としてスタッフも参加者と一緒に考え、一緒に楽しみ、参加者とともに学びを深め合う研修である。

毎年、各組・別院から多数の参加申し込みがあるが、今回は毎年夏休みを利用して開催されている第17組教化委員会主催の「小中学生のつどい」について紹介したい。

組内の若手僧侶を中心として開催されており、参加者には1泊2日の間、ご本尊を中心とした生活の中で、フィールドワークやレクリエーション等を行うが、その日程の中で特筆すべきものが、1日目の夜に供灯、2日目の朝に「仏様のおはなし」といった時間を設け、ただお寺でお泊り会に参加するだけでなく、仏事にも参加してもらい、お寺とはどんな場所であるのかを確認してもらう。

こういった組内の活動の中を通じて、組内はもとより、近隣の寺院に子ども会発足につながり、それが教区全体に対しての呼び掛けとなり、点と点が交わり一つの線となり、教区全体の青少年教化活動の活性化と助長につながっていくだろう。

このようなつながりは、参加者が成長するにつれて、他の研修事業である「U-19の集い」の参加へつながっていき、青少年教化活動のほかに、他の教化活動の参加のきっかけとなり、次代を担う「人」の育成として、今後の教区教化活動の「鍵」となっていくだろう。

今後も様々な組や別院の青少年教化活動に着目していきたい。



帯広別院を会場に開催されている。毎年大勢の参加者とともに1泊2日の研修を行っている。

この問題として、英霊顕彰ということの奥にある問題は、靖国神社を国営にすることによって、「日本」という民族共同体としての強固な連帯を作ろうとするところにある。また、「靖国に対し反対する者は日本人ではない」というその全人格を排除しその存在をも否定することにより、一人ひとりの主体性を奪い集団体制の中に没入せしめようということであるとしている。

しかし、師はこの靖国のもつている体質そのものが、自分自身の体質であり、浄土真宗の教えを聞いていながら、実はそういう体質の中で聞いていたのであり、靖国を生み出したところの明治以後の、あらゆる歴史の総体が、自身の体質そのものを形成しているのだとしている。であるならばどこで自らを「真宗教徒」であるとするのかができるのであろうか。それはまさに靖国問題によって日本人としての民族体質と真宗教徒としての信とが同時に問われ、浄土真宗の教えを改めて深く広く明らかにするところに、決して曖昧さを許さない厳しさで靖国問題が関わってくる中であって、どのように浄土真宗をいたただいてくのかという事が問われ続け、自身の信心がいかに個人的、主観的、現実的課題が脱落していた信心であったと目を開く機縁となる。そこに師は「靖国の恩恵」と頂かれたいったのである。

「真宗門徒一人もなし」というところから同朋会運動は始まった。真宗門徒一人もなしという事は、根本自民政調会長のまとめた靖国神社国家護持法案が議員立法として国会に上程された(同年8月5日廃案)。これに対して当時の真宗大谷派宗務総長訓彌信雄師と浄土真宗本願寺派総長豊原大潤師、両教団の代表名により、反対の「靖国神社法案に閣議院府自民党に対する要請」が提出された。この事が教団における靖国神社問題の直接的きつかけとなった。しかし、宗門が一連の戦争に対して行ってきた姿勢と行動つまり、戦時教学・戦争協力、そして戦争責任に対して総括がされていまいままでの当時の現状において、戦前からの国家神道政策の影響を受け続けて、戦後いまだその影響を払拭しきれない大半の一般寺院はその対応に大変苦慮し、あえてこの問題に触れることをしなかつたという。しかし一方では、声明が提出されたことで、追弔法要の在り方が徐々に考えなおされ、非戦の願いをもった動きともなっていた。



両堂屋根御修復の様子を間近に見ることができ感動。本山楽僧のすばらしい調べに、大いに触発!? されました。

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」
 教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

教化本部通信

【第64回】

真宗門徒の生活を回復しよう 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう
 すずんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

しんらんweb 検索 ほぼ毎日更新中

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 歩み(十五)

靖国神社問題から問われること (2)

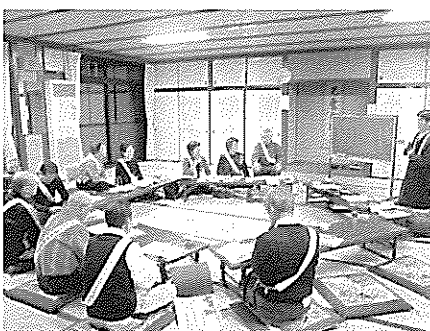
教化本部 古卿 誠幸

1990年(平成2)3月に北海道教区靖国問題対策協議会から出版されたリーフレット「真宗門徒と靖国問題」にこの問題並びに課題がすでに言い尽くされている。そのリーフレットの最後に「靖国問題はいろいろな問題を含んでいますが、信心の問題、すなわち日々の私の生き方の問題をぬぎにしては語ることができないことでもあります。私の足下から靖国問題を問いつけてまいりましょう」と結んである。これをさらに具体的に述べさせていただくなら、「国家とは何か」「戦争とは何か」「死とは何か」「霊とは何か」という問題を、本願念仏の教えの上から明らかにしなければならぬという事でありましょう。

北海道教区において開基百年記念法要が厳修された1969年(昭和44)の年は、戦前から脈々と引き継がれてきた宗門体質が集中的に問われた年であり、「開申」問題、部落解放同盟からの第一回糾弾会があった年である。この年6月初めて敗戦後の国会に、当時

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 お待ち受け総上山

▼奉仕団
11/13~15
教区指定北第3組真宗連続講座「ふるさと」後期教習奉仕団 38名



座談会でも活発な意見が交わされ推進員としてスタートラインに立つことを確認する宣誓文を作成しました。



先達の強い促しによって真宗本廟に足を運び御真影の前に身を置き念仏の歴史に触れる事が出来ました。

11/13~15
第5組後期教習 敬徳寺・高臺寺一般奉仕団 16名

▼一日参拝
11/25
和暢会(第17組を中心とする雅楽を志す有志の会) 8名